

# 授業づくりを核とする学校づくり運動に関する総合的研究 — 島小における表現活動の発生と展開 —

## A Study on the Creative School Management Movement Centered on Classroom Teaching : Focusing on the Creation and Development of Expression Activity at Shima Elementary School, Gunma Prefecture

狩野 浩二  
Kouji KARINO

斎藤喜博が、校長として学校づくりを展開した群馬県島小学校において、1957年から1963年にわたって撮影された写真（以下、島小写真群と表記）が遺族の手によって保管されていた。その写真のすべてを保存するための電子化作業と同時に、当時の関係者による証言によって、撮影対象、時期、場所等を特定する作業を進めた。その結果これまでに判明した事実に関して紹介し、あわせて今日における教員養成、教員研修、学校づくり等の在り方について検討する。

### 1. 島小写真群の検討

#### 1) 島小写真群の全体像

本稿では、斎藤喜博（1911-81）が校長を務めた“群馬県島小学校における教育実践（1952-63）”について、主として、川島浩カメラマン撮影による島小写真群の全体についての分析を行う。

2008（平成20）年12月において「授業研究を核とする学校づくり運動に関する総合的研究—島小写真記録の分析を中心に—」\*1として、島小写真群の分析について報告した。そのなかで、川島浩カメラマンが麦書房の要請\*2で島小に入り、その後撮影したおよそ一万枚に及ぶ写真の中の、約1割程度を分析した結果について報告した。その内容は、次の三点である。

---

十文字学園女子大学人間生活学部児童幼児教育学科

Department of Early Childhood and Elementary Education, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：島小 斎藤喜博 学校づくり 授業研究 表現活動

- ① 島小教職員の明るさ（厳しい実践の中にあるユーモア）
- ② 1957年当時における学校行事の演目（従来の通俗的な内容と新しい表現活動の萌芽的状态が混在）
- ③ 川島浩カメラマンが撮影対象としたものの変容（子どもの姿を活写するようになっていく）

今回は、すべての写真について“撮影対象”、“撮影時期”、“撮影場所”等を明らかにする作業を終え、現在、元島小教師の船戸咲子、川嶋（旧姓児島）環への聞き取り調査を通して、その内容を検討している。前号に引き続き、調査経過を報告する。以下断りのない限り、船戸、川嶋への聞き取りをもとに報告するものである。

川島浩カメラマン（故人）は、麦書房の要請により、群馬県島小学校初の実践記録集である『未来につながる学力』（麦書房から刊行、1958年3月）に掲載する写真を撮影するために、1957（昭和32）年6月25日に同校を訪ねている<sup>\*3</sup>。そのときから撮影し始めた写真は、『写真集 未来誕生』（斎藤喜博文、川島浩写真、1960年、麦書房。後に一莖書房から刊行）や『教育の演出』（斎藤喜博、1963年、明治図書出版）、『斎藤喜博の仕事（写真集）』（斎藤喜博文、川島浩写真、1976年、国土社）等に写真を使う際に、一部のネガフィルムの、コマが抜け落ちてしまったものを除けば、すべて遺族の手により保存されている。

写真は、ベタ焼きシートにして270枚あまりであり、撮影コマ数にすると一万枚を超える量である。今回の検討にあたり、そのすべてを新たにネガフィルムから焼き付け、複製を作成し、撮影対象等を明確にする作業を行った。

撮影対象の特定にあたっては、元島小教師の川嶋（旧姓児島）環と船戸咲子の協力を得た。

船戸は、斎藤喜博が島小学校に校長として赴任する1952（昭和27）年以前から、同校に勤務していた教師である。



【1】 分校5年船戸学級

川嶋は、川島浩カメラマンが撮影を開始した前年（1956年）から島小に初任で着任している。いずれも、当時の実情を実に鮮明に記憶しており、写真のコマを一枚ずつ拡大投影し、その撮影対象となった人物や撮影された時期、場所などを確定した。

今回の経過報告でもっとも注目している写真は、【1】フィルムコマ番号の一番（川島カメラマンの助手が記入）からなる、今日でいうところの〈表現活動〉に関しての写真である。

斎藤喜博は島小以降において表現活動を重視し、その後、各地の学校で授業とともに表現活動の指導に尽力した。その実践や指導の原点がどこにあるのかということが今回の検討の中で見えてきたのである。

## 2) 表現活動の萌芽形態

【1】の写真に登場する児童を指導したのは、この学級（当時島小分校5年生）の受け持ちで

ある船戸咲子である。撮影時期は、川島浩カメラマンが島小に入った1957年6月25日頃であると思われる。

船戸が指導した表現活動の特徴は、児童たちが音楽（時には教師の歌）に合わせて身体を動かすということを、まず指導しているということである。教師が手や足などの動かし方を教えるのではなく、音楽に合わせて児童が自ら想像した世界を全身で表しているのである。

船戸によれば、当時の島小児童は、特別なことを指導しなくても、音楽に合わせて動くことができたということである。島小児童は、日常的な遊びの中で植物や昆虫などの生物と親しん

でおり、そうした生物に対して具体的なイメージを豊かに持っていた。したがって、船戸がたとえば“花畑に舞う蝶々を表そう”と児童に呼びかければ、すぐにそれに児童たちは対応できた。花畑の様子やそこで蝶々が群舞する情景を児童たちは具体的に自ら想起できたわけである。

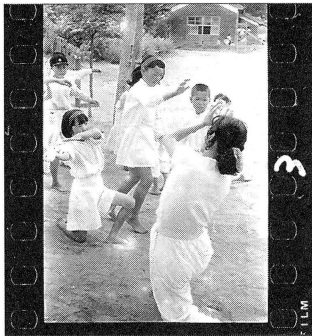
船戸や船戸学級の児童たちは、ここに掲げた写真に表れているように、楽しみながら身体を動かしている（【2】～【4】）。児童たちは、教師から指図されたというようではなく、自分たちで表現の世界をつくらしているのである。

船戸によれば、当時島小分校の校庭にあった“ユズリハの木”のそばで表現活動をするが多かったので、「ユズリハの木の下に行こう」という言葉が表現活動の合い言葉のようになっていたということである\*4。

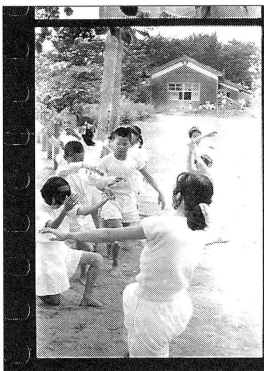
島小における教育実践の特徴は、集中した学習活動とその合間にあった楽しみのある活動を通して学んでいくということである。船戸や川嶋は、当時を振り返って、それを「高等な遊び」と表現している\*5。楽しいから学べるのであり、楽しいから身につくということである。嫌々ながらやったのでは、いかに価値のある学習であったとしても、とても身につかないということである。



【2】 船戸学級



【3】 船戸学級



【4】 船戸学級

### 3) 表現活動の指導原則

写真の【1】から【4】を見ると、船戸学級の児童たちは、最初は教師の動きを模倣していることが分かる。受け持ち教師である船戸自身がまず自ら心をひらいて児童たちの中に入り込んでいる。その上で、船戸は、実感を込めて昆虫や花などの生物を自らの身体全体を使って表現しているのである。

【306-308】は、同じ年度において、島小教職員により行われた研究会の写真である。会の目的は教材研究や授業研究、あるいはまた、保育園と小学校教育の接続など、教育

に関する勉強が中心であったが、しかし、残された写真には、【306-308】に見られるように、島小の教師たちが勉強の後で共に合唱したり、フォークダンス（【20】船戸学級の児童が表現活動の練習をした直後に撮影されている）したりするところが活写されている。



【306-308】 島小教職員による合唱(昭和32年)

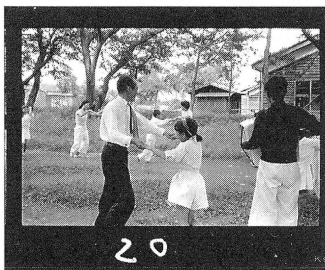
ほぼ同じ時期に撮影された8ミリ映像が残されているが、こうした映像にも、島小の教職員が心をひらいて学ぶ姿や歌う姿が記録されている。

今日において、学校の教師たちが歌ったり踊ったりする姿を教育実践の展開のなかで見ることはほとんどない。

最近、ある学校で行われた校内研修会に筆者が参加したときのことである。授業研究の後で もっとも気になったのは、教師たちの表現する力に大きな課題があるということであった。教材解釈や授業の展開を学ぶことも大事であるが、教師たちが胸襟を開いて児童たちに接することができるのでないのである。そこで、一つの提案として校内研修の時には、少し早めに話し合いを終えて、合唱してはどうかと提案してみた。また、学校行事の中では、全校児童の前で、教職員が心をひらいて合唱してみる機会をつくってはどうかという提案をしてみた。

たとえば、それは、合唱でもよい。斉唱でもよいから、全教職員で心をひとつにして歌ってみることである。舞踊表現となると、かなりの覚悟と努力が必要であるので、簡単な歌などを歌ってはどうかという提案をしたのである。

ところが、研究をとりまとめる教師自身がそれを拒否したのである。児童や教職員の前で歌うことは、絶対に嫌だというのである。明らかに大衆の面前で恥をかくことはまっぴらゴメンという態度であり、何かの原因がそこにあるにせよ、教師自身が心を閉じてしまっているのである。



【20】 斎藤喜博と児童

このような状態では、児童たちが心をひらいて学ぶ姿を創造することは難しい。たまたま表現することが得意な児童はよいけれども、歌を歌ったり、身体を動かしたりすることが苦手な子どもたちは、ますます心を閉じてしまうに違いないのである\*6。

ここに掲載した島小の写真を見ると、まずは教師が胸襟を開いて学ぶ姿を目にするのである。校長である斎藤喜博自身が歌い、踊っているのである（写真【20】）。

そして、そうした開放的な人間の姿が児童にさまざまな影

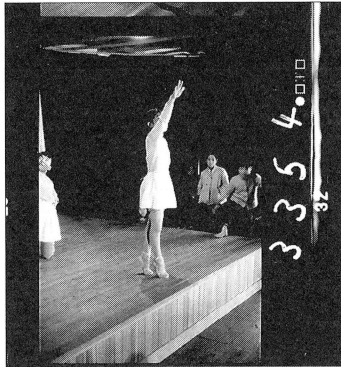


響を与えたと考えられる。

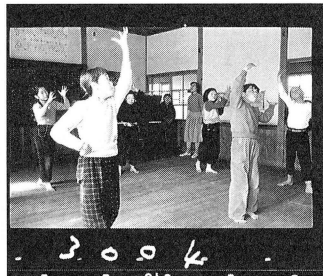
【1】の写真が撮影された時期から8ヶ月後に行われた「音楽と演劇と舞踏の会」(1958年3月18日本校、19日分校\*)の写真では、子ども自身が自ら考えて表現しようとしている(【3168-3170】、【3354】)。ここではピアノ伴奏(武田常夫)の曲にあわせて、それぞれに児童が動いている。何かの出来合いの、物語のすじを表現するということではなく、児童自らが植物や昆虫などの生物になりきって、舞台の上で自然界の情景を表現しようとしているのである。



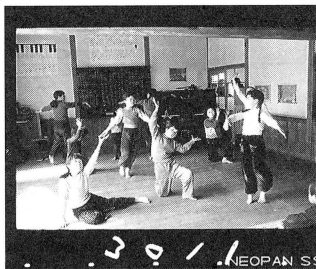
【3168-3170】 船戸学級「音楽と演劇と舞踏の会」1958年3月19日



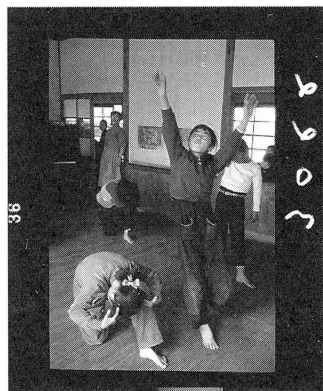
【3354】 3168と同じ



【3004】 船戸学級



【3011】 船戸学級



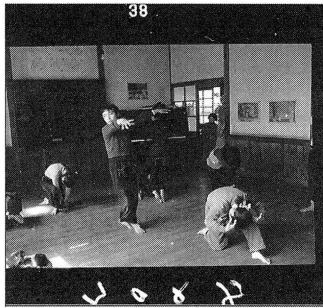
【3066】 船戸学級

写真は、主として分校の5年生(船戸学級)である。その影響を受けて、分校1年生である赤坂学級の児童たちも自らの実感に基づいた表現的な活動を開始している。

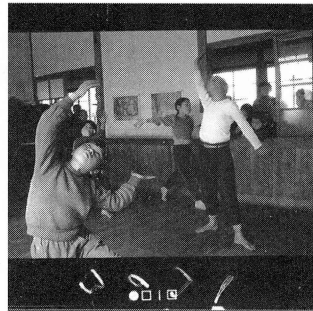
【3004】からの写真は、「音楽と演劇と舞踏の会」で発表する前の写真である。

時期の特定が難しいが、しかし、発表会を控えて分校で練習する姿を撮影したものと考えられる。

こうした途中経過を見ても、教師の動きをまねするというより、児童自らが動きを考えていることが分かる(【3004、3011、3066、3068、3069、3071】)。



【3068】 船戸学級



【3071】 船戸学級

## 2. 島小教職員の授業づくりと斎藤喜博による学校づくり

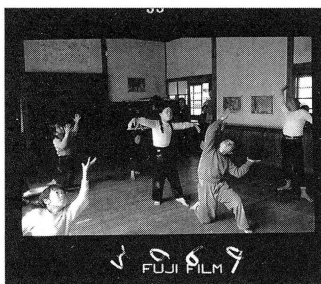
### 1) 各教科科目ごとの授業と表現活動との関わり

船戸は、このときの指導について回想し、次のように話している\*8。指導者の船戸は、児童たちに対して、「お花になってごらん」と声をかける。すると、学級の児童たちは、自分で考えてそれぞれ自分のイメージした「お花」を身体全体でつくったということである。

【3066】では、向かって左側の子どもが“つぼみ”のような状態であることが分かる。その子どもが少しずつ花を開かせていき、【3071】では、大きく花開いた状態を身体全体で表現している。時間とともに変化していく植物の状態を具体的にイメージしながら、自分の身体全体で表現しようとしているわけである。

【3066】から撮影順に写真を連続的に見ると、児童が音楽（ピアノ伴奏は、分校1年担任の赤坂里子）に合わせて、“お花”のイメージを変化させていることが分かる。

【3071】の右側の男子児童は、大きな木が枝を天に向かって広げているような姿であり、風に吹かれたかのように少し枝を左右に揺するくらいの動きである。



【3069】 船戸学級

こうした動きの工夫は、船戸によれば、すべて子どもが音楽に合わせて自分で工夫したことであったということである。

たとえば、船戸は、国語などの常日ごろの授業の中で、日常的に、イメージをつくることを指導している。それを身体を使ったり、描画で表したり、ことばで表したりする訓練が島小の児童にはできているのである。こうした学習活動が日常的に行われていることで、表現活動の質が高まっていると考えられる。

通常の授業で概念化した抽象的な指導を繰り返していたら、とてもこのようには表現できないのである。

子ども自身が具体的なものごとの状態を想像し、それを実感として理解できているから、それを表現することが可能になる。これがもし、子ども自身の考えの結果でないとすれば、とてもこのようなしなやかな表現は出てこない。

最近、筆者が訪ねた学校で、教員経験年数の浅い教師の授業を見る機会があった。授業では、

「もちもちの木」を学習している最中であり、児童たちは一所懸命に授業に参加している。ところが、その中に一人だけ授業に入り込めていない児童がいるのに気がついた。その児童は、作品の原作本を持ってきており、その絵本を楽しそうに見ている。授業の最初から、担任教師が行う授業にはこの子は参加していないのである。

原因は、作品に描かれた情景を読み取る作業が十分には行われていなかったことにあった。作品に登場するカモシカが生息するようなところを児童たちはまったく想像できていなかった。雪隠に至っては、現代の文明化された生活からは、まったく想像の出来ないものである。

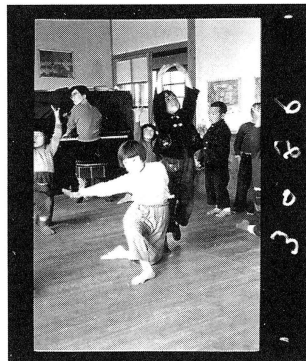
教材文は、児童の生活体験にはない世界である。その世界を児童たちが十分には想像し切れていなかったことが、ひとりの子どもを授業の世界から切り離してしまった原因である。

授業の中での読み取りの様子を見てみると、どうも作品世界とは異なるイメージを児童たちは（教師も含めて）語り合う。そうした違和感を敏感に感じ取った児童が、教室の中にいながら別の世界に浸っていた。そういう状態だったのである。

島小においては、学級ごとの差はあるけれども、当時において典型学級と呼ばれた船戸学級では、日常的な授業において子どものイメージをふくらませ、育てる努力をしていたと考えられる。子どもが自分の頭で考えて、自分の身体で表現するということができている。

船戸が、唯一児童に直接的に指導したのは、“足の付き方”であったということである<sup>\*9</sup>。船戸は、足のつま先が身体正面から見て外側を向くようにすると、バランスよく立てるということだけを指導した。

【1】を見ると、背中を見せた船戸が、足のつま先を外側に向けてバランスよくひざまずいている。【3071】の男子児童、向かって右側や【3066】の女子児童の足を見ると、船戸が指導した基礎的な身体の使い方がしっかり身についていることが分かる。



【3086】 赤坂学級



【3087】 赤坂学級

【3086】以降の写真は、同じ日に撮影された赤坂里子学級の児童の姿である。場所は、同じように分校の音楽室であり、ピアノを演奏しているのが赤坂である。

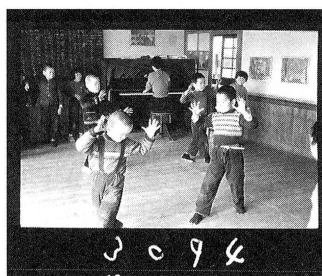
この日は、船戸学級と赤坂学級とが連続して表現活動の練習をしている。ピアノ伴奏は赤坂が担当し、手前に船戸がいる。船戸は、子どもたちの表現活動を見ながら、指導していたと考えられる。

【3094】から、同じ時間帯に撮影されたものであり、いずれも赤坂のピアノ伴奏、船戸の指導で表現活動をしていることが分かる。分校1年の児童は、5年生（船戸学級）の児童が表現する姿に憧れを持ち、自分たちも実感を込めて表現しようと努力している。

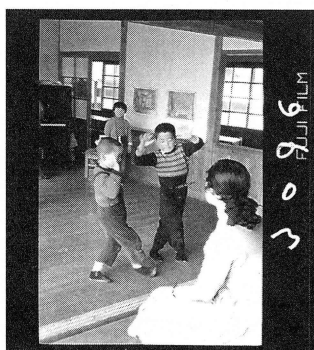
【3087】を見ると、赤坂学級の児童（分校1年生）は、これに先立って行われた分校5年船戸

学級の児童の姿を見ながら真似して動いているように思える。足の動きなどは、うまく真似ているものの、手の動きにまでは意識が向いていない。

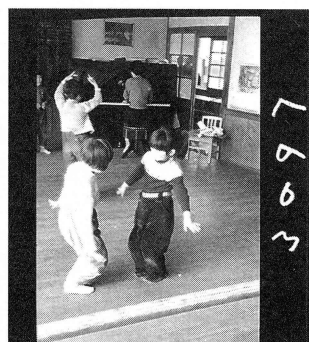
【3094】は、いかにも1年生らしい動物の動きを真似したような動きである。【3096】で手前にいて背中を向けているのが、船戸咲子である。船戸や赤坂の指導により、子どもは自ら抱いているイメージを身体活動の上に結晶化させ、さらにより具体的なイメージを実感することができるようになるわけである。



【3094】分校1年生赤坂学級



【3096】赤坂学級



【3097】赤坂学級

## 2) 表現活動に関する斎藤喜博の指導

船戸・川嶋によれば、1956（昭和31）年度の終わりのころ、校長の斎藤喜博から、これまでにないような表現活動を工夫してみるように言われたということである\*10。分校では船戸が、本校では川嶋（旧姓児島、本校1年担任）が翌年（1957年）からそのことに挑戦した。

しかし、川島浩カメラマンが撮影した島小写真群のすべての写真を通して見てみると、本校児童が表現活動に取り組んでいる姿は、ほとんどといってよいほど撮影されていない。川島カメラマンは、斎藤喜博から何を撮影すればよいのかの手ほどきを受けていたということであり、撮影された事実がないということは、斎藤喜博が撮影するに値しないと考えていたということである。

川嶋環によれば、斎藤や川島を満足させるような児童の姿は、島小本校ではなかなか出なかったということである\*11。川島カメラマンが撮影した島小写真群のすべてを見た限りにおいて、また、船戸や川嶋の証言をあわせて検討してみると、表現活動の萌芽形態では、分校における船戸、赤坂による指導の試みの方がうまくいっていると考えられるのである。

島小において川島カメラマンが撮影する際には、斎藤喜博がつねに立ち会っていたということである。早朝に児童や教職員が登校する風景や夕方になって下校する姿を撮影したものなどは、おそらく川島カメラマンが単独で撮影したと思われる。これらは船戸や川嶋の証言によっても、宿直室に寝泊まりしていた川島カメラマンが独自に撮影したものだということが判明している。こうした例外を除けば、おおむね川島カメラマンの撮影には斎藤喜博が立ち会っていたと考えられる。

また、川嶋や船戸によれば、島小の児童を撮影することに関してさまざまな注文を出し、撮影する場所に案内したのも斎藤喜博であったということである\*12。したがって、初めて島小

に入り、撮影を開始した川島浩カメラマンが真っ先に撮影した写真が船戸学級（【1】昭和32年、分校5年生）であったということは、当時において斎藤喜博が川島浩カメラマンの手を借りて記録して残しておきたいと考えていた実践が、船戸のものであったということである。

### 3) 表現活動における萌芽形態の特徴

これらの写真に共通しており、特徴的なのは、音楽に合わせた動きを児童たち自身が考え、工夫していることである。

これらの写真が撮影された1957（昭和32）年の初夏に、ほぼ同時期に、青山重大や金子緯一郎によって実践されていた島小の表現活動（野外劇、演劇、影絵遊び、指人形劇など）では、物語に筋があり、その筋を説明し、表現するというものが多かった\*13。その名残を、その他の写真に見ることができる。

船戸や川嶋によれば、その当時、金子緯一郎（本校5年担任）と青山重大（分校6年担任）が学校演劇の指導や演劇脚本づくりなどに夢中になっていたということである。

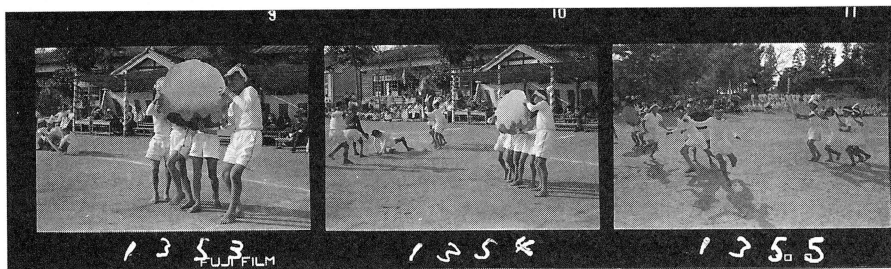
金子は、いくつか創作した演劇脚本の作品を『学校劇』などの教育雑誌に発表し、それを島小児童に演じさせていたということである\*14。

話の筋が作品にあるということは、その内容を説明するような動きが表現活動の中心になる。たとえば、「桃太郎」や「さるかに合戦」などの、昔話の筋を借りた脚本であれば、その作品世界には必ず主人公がおり、その主人公の出会いや事件や後話が筋として表現される。そのような脚本があれば、舞台装置や衣装などにより、情景や人物描写を説明し、登場人物のやりとりが観客に分かる（見える）ようにしようという意識が指導者に働く。

一般に演劇というものは、そうした性格を持つものである。

それに対して、船戸が始めた舞踊的な表現活動は、子ども自身の美しい姿を見せるものである。音楽に合わせて動くのは、子どもの美しい動きを表すことが目的であり、物語の筋を表すことが目的ではない。身体の動きは、子ども自身が考える。その動きは、子どもの内面にイメージ化された具体的なものである。それが児童自身によって象徴的に表現されるのである。

今日では、オペレッタや総合表現として取り組まれている表現活動\*15の原点が、島小の船戸学級で試みられた表現活動にあったということが、これらの写真群から推定される。





【1211-1213】 分校運動会 1957年10月11日

### 3. 表現活動の可能性

#### 1) 表現活動による児童の成長と教師の指導力

今日において各地の学校や保育園などで取り組まれている表現活動は、斎藤喜博による直接の指導を受けたものではない。斎藤から直接的な指導を受けた研究者や教師が指導したものがほとんどである。その他、教授学研究会等によって公刊された表現活動に関する文献や映像などにより、間接的に指導技術を学んだ指導者が指導したものが存在する。いずれにしても、それらについて、筆者が見た表現活動の多くは、話の筋を説明しようとして児童の動きが形式的になったり、通俗的になったりしたものが多い。

原因はさまざまにあると思われるが、改めて島小において取り組まれた表現活動を川島カメラマン撮影による写真から見てみると、子どもの実感がよりよく現れているのは船戸学級の児童のものである。これが次第に赤坂里子や武田常夫により継承され、島小において結晶化していったものと見てよい（【1211-1215】分校運動会で発表されたリズム構成「ちょうちょう」\*16）

今回の写真を見る限りにおいて、今日において、通俗的になってしまったり、話の筋を追うことばかりを意識する、あまりに動きが形式的で、実感のこもらない表現活動は、子どもの中に具体的なイメージが育っておらず、指導者が形だけを子どもに押しつけていることにより生じることであるということが分かってきた。足の運びや手つき、姿勢、視線というような要素は、当然のことながら、身体的な表現活動を実現するための技術として重要であるが、しかし、そればかりに指導の内容が偏ってしまえば、子ども自身が豊かにイメージすることがお座りになる。特に、船戸が日常的な授業の中で、児童自らが豊かにイメージすることを大事にしてきたという言葉が重要であると考える。

今日、表現活動といえば、いきなり作品を子どもに与えて、それを過去の実践の映像を借りながら形だけ真似するという指導がかなりあると思われる。それは、授業づくりと表現活動とを、別のものと発想してしまっていることが原因である。

授業づくりにはなかなか困難が多く、授業はすぐに改善できるものではない。それは、授業には教材解釈に始まり、授業の技術、子どもを観察する力、子どもの論理を組織する力など、授業を成立させる要素が複雑に絡んでいるからである。

授業をよくするための努力に比べれば、表現活動の指導の方が遙かに成果を上げやすい。それは、そもそも表現するということ自体に、子どもの心をひらく作用があるからである。幼稚



園や小学校の低学年などの子どもの場合は特に、身体表現活動を好む傾向がある。指導を受ける子どもより、指導者である教師の側に抵抗や違和感があるということが普通である。子ども自体は表現が好きなのである。

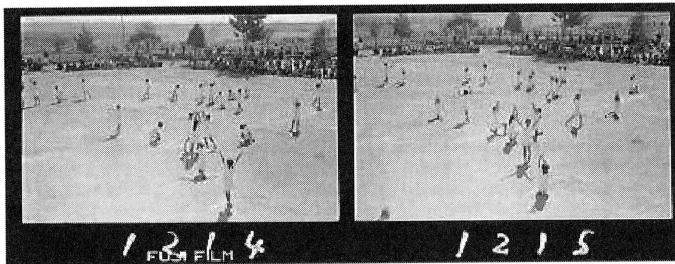
特にピアノの演奏（伴奏）や歌唱表現、身体表現などは、それ自体が心を和ませ、一種の遊びのような効能がある。したがって、授業より表現活動に熱心に取り組む学校が多くなるのは自然なことである。しかし、それではやはり表現活動の質は高まらない。授業においても、表現することを大事にし、実感を込めて表現するということを指導していく必要がある。島小における船戸の表現活動に関する指導場面を撮影した写真を見てみると、そのことの大切さが理解できる。

## 2) 表現活動の可能性

筆者は、これまでにいくつかの教員養成学部において、表現活動の指導に取り組んできた\*17。その際、もっとも心を砕いてきたことは、学生たちを型にはめないということである。まずは、受講生が自分のイメージにしたがって動いてみる、朗読してみる、歌ってみるということである。

それは、指導の出発点が、受講生自身の持つ論理の中に存在するからである。受講者がどのようなイメージを持っているのか。それを指導者自身が瞬時に把握し、次の指導の手がかりを得るということが原則だからである。それをしないで、予めどのように指導をするかということとを固定的に考えていると、受講者自体の現実の姿が見えてこないのである。

現実の姿が見えなければ、現実を変えることは難しい。せいぜいできるのは型にはめることくらいである。



【1214-1215】 分校運動会 前同

指導者の発想や枠組みの範囲の中で、指導者の頭で考えた型にはめることによって、生き生きとした表現は生まれてこない。受講者の良さを生かしつつ、やる気を引き出しつつ、自ら表現するように仕向けていかなければ、受講生は、いつま

でたっても受動的な、やらせ的な表現活動の世界にとどまってしまうのである。

近年、各地の教員養成系大学等で表現活動に取り組むところが増えてきている。教員養成GPに採択された大学では、「総合表現」と名付けた活動を展開するところも出てきている。こうした傾向は歓迎したいし、これからもこのような取り組みが増えていくことは期待されるが、しかし、その内容の検討は必要である。

その際の視点として、受講生が本当に生き生きと活動しているかどうかということを挙げておきたい。心の奥深いところで感動するような体験になっているかどうか、表現活動の成果により、日常的生活態度までがよりよく向上していくような、そのようなものになっているか



どうかをしっかりと点検していくことが必要である。

本稿で検討した島小の表現活動においては、第一に子どもが生き生きと活動するということを目的としていた。児童が主体的に伸びようと努力していくことが大事にされているのである。その結果として、授業や学校行事などの場面で、生き生きと活動する児童の姿が現れてきたのである。

大学生と小学校児童とを単純に比較することはできない。しかしながら、学校教育の場において、表現活動の指導に取り組むということは、そのねらいが大事である。子ども（学生や児童、生徒）が、表現活動を通して、自己を高めようと努力し、学習活動以外の場面においても、より一層意欲的になることを目指していきたいものである。

---

\*1 十文字学園女子大学人間生活学部研究紀要第6巻、39-52頁、2008年。

\*2 斎藤喜博編『未来につながる学力』1958年に使用する写真を撮影するために1957年夏から島小に入った。

\*3 『斎藤喜博全集』15-2巻、374頁、国土社、1971年

\*4 2009年6月6日、埼玉県深谷市子どもの本の店アスランにおいて、船戸咲子、川嶋環のお二人から聴取。聴取にあたっては、川島浩カメラマンが撮影した島小写真をビデオカメラで撮影し、同時に、その映像をスクリーンに投影して、お二人に見ていただいた。

\*5 2009年6月6日、埼玉県深谷市子どもの本の店アスランにおいて、船戸咲子、川嶋環のお二人から聴取。

\*6 次の記録は、元島小教師の川嶋環が宮城教育大学附属小学校で行った授業について触れた文章であるが、後半で執筆者自身が小学校で行った“表現活動の授業での失敗談”が紹介され、教師自身こそが心をひらく必要性を指摘したものである。横須賀薫「教師こそが生き生きと」、横須賀薫・梶山正人・松平信久編『心をひらく表現活動 ② みんなでつくる』教育出版、1998年、27-29頁。

\*7 金子緯一郎編『島小十一年史』1966年、麦書房（大空社復刻版1995年）、58頁

\*8 2009年6月6日、埼玉県深谷市子どもの本の店アスランにおいて、船戸咲子、川嶋環のお二人から聴取。

\*9 同前。

\*10 同前。

\*11 川嶋によれば、時々川島カメラマンが撮影しにきてくれたことがあったが、フィルムを入れないカメラで、シャッターを切っていたそうである。これは後で分かったことであるということだが、いかにも厳しい追究を授業や学校行事の中でしつつも、随所にユーモア（ある意味で言えば皮肉）が溢れていたことを想像させるエピソードである。

\*12 2009年6月6日、埼玉県深谷市子どもの本の店アスランにおいて、船戸咲子、川嶋環のお二人から聴取。

\*13 狩野、授業研究を核とする学校づくり運動に関する総合的研究—島小写真記録の分析を中心に—、十文字学園女子大学人間生活学部研究紀要第6巻、39-52頁、2008年。

\*14 主なものは以下の通り。金子緯一郎「人形劇 たにし息子」、『教育』NO.32、1954年5月、114~122頁、国土社。金子緯一郎「脚本を書きながら」、『文化労働』1955年9月、25~32頁、群馬県教員組合。

金子緯一郎「特集 演劇の方法の実践 いきいきとした授業をするために—授業のなかでの目的行動とということ—」、『学校劇』NO.62、1959年11月、8～12頁。

\*15 青森三本木中学校、東京瑞穂第三小学校、石川東陵小学校などで発表された表現活動は、いずれも島小を原点と考えてよいものである。伊勢隆、学校全体で表現活動に取り組む、横須賀薫・梶山正人・松平信久編『心をひらく表現活動3 表現の追求』17～36頁、教育出版、1998年。箱石泰和・田嶋定雄編著『教育の発見と創造〔正〕』、一荃書房、1984年。箱石泰和・田嶋定雄編著『教育の発見と創造〔続〕』、一荃書房、1985年。箱石泰和、川島浩写真『写真記録 教育讃歌—学校に輝きと創造を』、一荃書房、1990年。小林一之『東陵小の教育』一荃書房、1979年。

\*16 金子緯一郎編『島小十一年史』54ページ、麥書房（『島小研究報告』第6巻、1995年、大空社に所収）。また、1960年に刊行された斎藤喜博『授業入門』（国土社）では、「リズム表現『蝶々』」と標記し、〈私の学校には、全校児童が庭一ぱいにひろがってやる野外劇とか、一つの物語をすじにして、そのなかで体操とかリズム運動とか、舞踊とかを全校児童で構成して行く「構成遊戯」など、さまざまなものがある。これらはみな学校で創作するのだが、そういうものの一つに、リズム表現「蝶々」がある〉と斎藤はいう。

\*17 狩野、学生の表現活動、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、第13巻、25～37頁、2003年。

#### 【附 記】

本研究にあたって、科学研究費補助金（研究代表者：横須賀薫）〈授業研究を核とする「学校づくり」運動に関する総合的研究〉基盤研究（B）一般、課題番号20330166、平成20～22年の補助を受けた。

また、日本教育方法学会第45回大会（香川大学、2009年9月27日）において口頭発表した内容をもとに、執筆したものである。

川島浩カメラマンのご遺族である川嶋環氏には、ネガフィルムをお貸しいただき、新たなプリント作成への協力をいただいたほか、プリントされたベタ焼きを見ながらの解説作業にお力添えをいただいている。船戸咲子氏には、当時の状況などを詳細におはなしいいただいた。記して感謝申し上げる。

#### Abstract

Kihaku Saito (1911-1981) was a well-known educator who creatively managed Shima-mura Elementary School in Gunma Prefecture as its principal for 11 years from 1952. He was an excellent administrator and a creator of a school management system who was clearly superior to his contemporaries, at the center of an educational movement that created the school administration approach from the 1950s to the 1980s in Japan's educational system.

A photographer, Hiroshi Kawashima (1925-2003), visited Shima-mura Elementary School to take photographs for *Mirai ni Tsunagaru Gakuryoku* (1958, Mugi-syobou, Records of Educational Practice at Shima-mura Elementary School) at the request of the publisher in July, 1957. Saito came to like Kawashima's work in the middle of the project. Kawashima became absorbed by Saito's work at the school, and subsequently continued to take photographs there at Saito's request over the next six years. The number of photographs in the Shima-mura Elementary School collection by Kawashima reached about 10,000.

Saito gradually came to believe in the qualitative improvement of educational research on schools and academic circles of the future through the educational heritage of the school management movement, and various media were used to make records of the educational practice at Shima-mura Elementary School that are still relevant even today. However, the photographic resources created pose a number of issues for the future. Firstly, the quality of the images is bound to deteriorate over time. Secondly, it is not possible to distinguish where the pictures were taken, or to pinpoint the object, time etc. of each one. Thirdly, the photographs are at risk of being dispersed and lost.

The author reported on the process of preserving the situation of the time in conjunction with parties related to Shima Elementary School based on the photographs described here.